

エゾシカを減らして知床の森を守ろう！ ～関係者連携によるエゾシカ捕獲と今後の展望～

北海道森林管理局 知床森林生態系保全センター 今福 寛子
上野 利康
荻原 裕

はじめに

知床半島におけるエゾシカは、明治時代の大雪や乱獲の影響で、一度は地域的に絶滅をしたが、1970年代に入ってから阿寒方面より個体群が移動してきたことにより再分布をしている(1)。その後、同半島の主要な越冬地の一つである知床岬での越冬数は1986年の53頭から急激に増加し、1998年には592頭に達し、以降は増減を繰り返しながらもほぼ同じ数で推移している(1)。他の主要な越冬地でも同様の傾向が見られており、越冬地を中心とした樹皮食いによる特定樹種の激減と更新不良、林床植生の現存量低下と多様性の減少など、知床世界自然遺産地域の環境に様々な影響をもたらしている(1)。そのため、エゾシカを適切な個体数に維持するなど早急の対応が必要である。

これまでも知床半島では、斜里町や環境省を中心にエゾシカ捕獲が行われてきた。斜里町はウトロ高原や市街地に近い半島基部の農地等で、環境省は半島先端部など世界遺産地域でエゾシカ捕獲を実施している。しかし両機関とも、半島の中間地点である「真鯉(まこい)地区～ウトロ地区」(図-1)の捕獲には手が回らない状況である。その結果、当地はエゾシカの集積地になっていることが知床科学委員会エゾシカ陸上生態系ワーキンググループ会合(以下エゾシカWG)で指摘されており、対応が求められていた。このことから当地域に対して、北海道森林管理局が本格的な捕獲を実行することにした。

平成25シカ年度(シカ年度とは6月から翌年5月までを指す)には、ウトロ地区において請負事業による「囲いワナによるエゾシカの捕獲」と「民間資金のみによる捕獲事業」、真鯉地区では「林道除雪による一般狩猟への支援」を実施し、合計187頭の捕獲に貢献した。本稿では、これらの取組における関係機関等との連携及びエゾシカ個体数削減へ向けての今後の施策展開方向に焦点をあてて報告する。

囲いワナ捕獲事業の実施

1) 知床における囲いワナ捕獲の利点

エゾシカ捕獲には銃猟など多数の手法が存在するが、今回は囲いワナによる捕獲を選択した(図-2)。知床半島では、オジロワシ等希少鳥類が多数営巣しているが、囲いワナには銃猟と比較し騒音が少なく、上記鳥類への悪影響をかなり避けやすいという利点がある。また、安全確保が比較的容易であり市街地や公道の近くでの実施がしやすい利点もある。

2) 捕獲時期の選択

平成25シカ年度の囲いワナ捕獲時期はエサ資源の乏



図-1 H25年度捕獲実施箇所位置図及び捕獲頭数

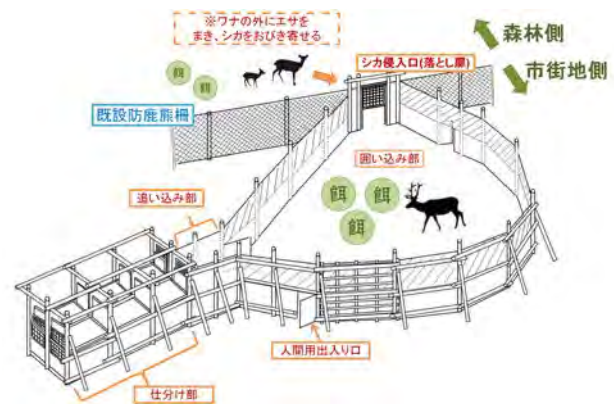


図-2 今回設置した囲いワナのイメージ

しくなる12月～5月とした。しかし、4月～5月前半にはヒグマの出没が見られ、周辺住民や捕獲作業に危険を及ぼす可能性が生じたことから捕獲を中断せざるを得なかった。

3) 関係者との連携や情報の収集

今回のエゾシカ捕獲事業では、特に効果的な捕獲場所選定等について関係者との連携に注力した。

(1) 環境省との連携

環境省とは主に捕獲場所について連携を図った。今回の捕獲事業とほぼ同時期に、環境省も囲いワナ捕獲を実施することになったものの、環境省の設置箇所候補は1箇所に限られ選択の余地がない状況であった。これまで

Hiroko IMAFUKU, Toshiyasu UENO, Hiroshi OGIWARA (Shiretoko Forest Ecosystem Conservation Center, Hokkaido Regional Forest Office, Shari 090-4355)

Cooperative capturing scheme to reduce sika deer population in Shiretoko.

の経験から、エゾシカの囲いワナに誘引できるのは 500 m までと想定されたことから、当初当センターが想定した捕獲場所では競合する恐れがあると考えられた。このため、他の候補地を有していた当センターが囲いワナ設置場所の変更を検討することとした(図-3)。

(2) 地域住民との連携

地域住民には、捕獲事業実施への理解と協力を求めた。その結果、当初想定した捕獲場所では囲いワナ捕獲に伴うヒグマの出没に不安を感じる住民もいることがわかった。さらに冬期のエゾシカの集結状況を、地元住民などから聞き取った結果、ウトロ国設野営場付近がより候補地として適していることがわかった。

また、地元自治会長等に説明を行うとともに、町の広報紙を通じて地域住民へ捕獲実施を周知した。

(3) 希少鳥類について研究者との連携

オジロワシをはじめとして、希少鳥類の研究者 3 名から生息状況を聞き取った。その結果、ウトロ国設野営場周辺で囲いワナ捕獲を実施しても希少鳥類への影響はないことがわかった。

(4) 捕獲個体受入業者との連携

エゾシカ捕獲では、捕獲したシカを殺処分して廃棄物として処理する場合、さらなる経費がかかってしまう点も問題になる。そこで、当センターでは真鯉地区にある(株)知床エゾシカファームと、捕獲したシカを無料で引き取っていただく協定を結んだ。このことで、廃棄物処理費の削減、迅速な引き取り及びシカの有効利用を可能にした。



図-3 捕獲場所変更前及び変更後位置図

4) 技術的な課題

今回の囲いワナ捕獲では、警戒心の低い当年仔を多く捕獲できたが、メス成獣はあまり捕獲できなかった(表-1)。メス成獣の個体は、シカ侵入口付近にとどまり、ワナ内部まで誘引することが難しい状態だった(図-4)。

当囲いワナはウトロ市街にシカやクマが侵入するのを防ぐために平成 18 年に設置された防鹿熊柵に併設する形で設置しており、メス成獣は防鹿熊柵より市街地側に入れないと学習していた可能性がある。

また、囲いワナ全体がカーブ状だったためシカに閉塞感を与えてしまったこと(図-5)、囲い込み部に使用した耐水板にエゾシカが映り込み警戒させてしまったことも

シカ捕獲を妨げた原因となった可能性がある。

今後は、シカ侵入口(落とし扉)を森林内に設けること、耐水板を光沢のない部材に変更するなどの対策を行う考えである。また、おとりジカを導入することでワナ内部に警戒心の強いシカを誘引することも検討していく予定である。おとりジカとは、警戒心の強いシカを誘引するためのシカで、環境省が知床で行っている例(聞き取り)は以下の通りである。

- ①警戒心の弱いシカ(以下、おとりジカ)を捕獲シタグをつけて放獣する。
- ②おとりジカを捕獲したら必ず放獣する。
- ③「囲いワナは安全」と学習したおとりジカが頻繁に囲いワナに入出入りするようになる。
- ④おとりジカの様子を見たシカが、警戒を解き囲いワナに入るようになる。

表-1 ウトロ国設野営場での捕獲実績内訳

シカ性別他	捕獲頭数
0 歳	24 頭
メス成獣	14 頭
オス成獣	3 頭
合計	41 頭



図-4 扉の前までは誘引できたもののワナ内に入らないメス成獣の集団



図-5 囲い込み部内部の様子

民間資金のみによる捕獲事業

当センターでは単独の捕獲事業に加え、斜里町・(株)知床エゾシカファーム・網走南部森林管理署(北海道森林管理局)の三者による共同捕獲事業を実現させた。これは、斜里町が捕獲主体となって鳥獣保護法に基づく有害鳥獣捕獲の申請を行い、(株)知床エゾシカファームが囲いワナ設置と捕獲作業を行い、網走南部森林管理署が囲いワナ用地を無償提供するというスキームであり、平成26年2月に協定を締結した。この捕獲事業によって、平成25シカ年度には91頭を捕獲した(図-7)。このスキームはさらに3年間続ける予定である。

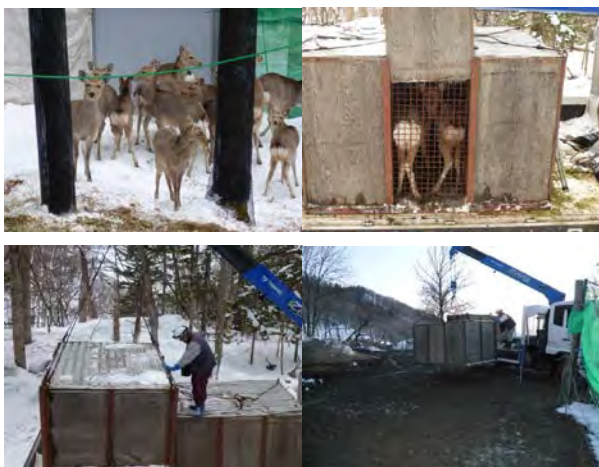


図-7 捕獲されたエゾシカ及び養鹿場への運搬の様子

林道の除雪による一般狩猟の促進

一般狩猟によるエゾシカ捕獲を促すため、真鯉地区にある林道1路線の除雪を1月から2月にかけて8回、延べ16km行い、56頭のシカ捕獲に貢献した。

当林道周辺は一般狩猟によるエゾシカ減少を期待して平成19年度から中断期間付きの可猟区となった地域である。その成果もありエゾシカは若干減少しているが、当局で実施している森林植生調査(2)ではエゾシカが植生に強い影響を与えつつあることが確認されており、いまだに密度が高いと判断される地域である。

当初はこの地域での囲いワナによる捕獲も検討したが、下記の点を考慮した結果、林道除雪を実施して捕獲しやすい条件を整えることで一般狩猟の促進を図ることとした。

- ①可猟区であり一般ハンターが捕獲したほうが低コストである。
- ②狩猟者から、林道除雪により捕獲個体の搬出条件を改善してほしいとの要望が、斜里町を通じて森林管理署に出されている。
- ③地元猟友会は環境省が行った知床岬等での捕獲にも積極的に参加しており、捕獲数の向上にさらに貢献していく考えを持っているなど、生態系保全に対して意識が高い。

今後は、自動撮影装置を用いたモニタリング調査等によりエゾシカ個体数の動向を把握しながら、除雪林道の拡大等を検討していく予定である。

今後の展開方向

1) 関係者との連携強化

今後のエゾシカ捕獲を進めるに当たり、以下の点に着目して関係者とさらに連携を深めなければならないと考えている。

(1) 斜里町等との連携

今後予定している新たな捕獲予定箇所の中には町道や旧国道跡地を利用するものも多くなるため、町などの管理機関との積極的な調整を行う必要がある。

(2) 希少鳥類の研究者との意見交換

次シカ年度以降の捕獲検討箇所について、希少鳥類の専門家から以下の意見が出されている。

- ①希少鳥類の繁殖期間である2月から6月の捕獲は、できるだけ避けて欲しい。
- ②希少鳥類は営巣箇所への人や車両の出入りに敏感なので、囲いワナであっても間近での捕獲は避けて欲しい。

知床半島は海沿いにはほぼ隙間無く希少鳥類が生息している地域であり、エゾシカ越冬個体群の捕獲が適切な時期と、希少鳥類の営巣時期が重なることから対応が難しいところである。今後も頻りに研究者と協議をし、囲いワナの設置候補箇所ごとに実施内容を柔軟に検討していく考えである。

2) 捕獲をさらに進めるための課題

知床半島のエゾシカ生息密度を低下させるには、引き続き捕獲を実施していく必要があるとともに、捕獲を効率的かつ長期的に続けられる工夫を進めていくことが重要である。

(1) 囲いワナ捕獲の低コスト化を図る

囲いワナ捕獲は銃による捕獲より、一頭当たりの捕獲コストが高いという欠点がある。しかし、知床半島はエゾシカを捕獲する際、希少鳥類の営巣と生息に配慮しなければならない地域であり、今後も囲いワナ捕獲を主体に実施していかざるを得ない。そこで今後、囲いワナの設置、撤去、移動の省力化を図るため、部材の耐久性の確保やパーツ化を進め、コストを削減することが重要と考える。

また、現在の囲いワナ捕獲は、「ワナを設置する工事」と「捕獲(オペレーション)作業」をあわせて一契約としているが、その両方に対応できる事業者は限られているため、大規模な捕獲事業を展開することが難しいという問題がある。このため、「ワナを設置する工事」と「捕獲(オペレーション)作業」を別契約にすることも検討に値すると考えている。

(2) 民間活力を活かした捕獲の促進

およそ年間20%の割合で増えると言われるほど、繁殖力の強いエゾシカの生息密度を減らすには、継続的に捕獲圧をかけていく必要がある。しかし、行政のみで大規模かつ集中的な捕獲を続けるのは限界があるとともに、近年シカ肉の需要の広がりがみられていることから、今後は民間主体の継続的な捕獲を導入することが有効である。この点から当センターでは、今回、前述した2つの協定を締結するなど民間活力を活かした手法も試行したところである。

また、3月中旬から4月中旬までは、当地域でのシカ捕獲に適した時期でありながら、行政機関の年度替わりの時期であり、思い通りの事業発注が難しい時期である。このため、当センターでは、平成25シカ年度に設置した囲いワナを民間事業者に貸し出すことも検討中である。民間事業者にとってはワナ設置費用を負担せずに捕獲を行えるという大きなメリットがあることから、借り手が現れるものと期待している。

三者協定方式やワナ貸し出しについては職員のアイデアであるが、関係する民間事業者からも、今後コスト面を含め様々な知恵が生まれるかも知れない。それらの知恵も上手に取り入れることで知床の生態系保全につなげていきたいと考えている。

引用文献

- (1) 環境省釧路自然環境事務所・林野庁北海道森林管理局・北海道・知床世界自然遺産地域科学委員会 (2014) 知床白書 平成24年度知床世界自然遺産地域年次報告書. 172pp. http://dc.shiretoko-whc.com/data/research/annual_report/H24annual_report.pdf
- (2) 北海道森林管理局 (2013) 平成24年度知床における森林生態系保全・再生対策事業 (広域調査) 報告書.